風姿花伝

秘すれば花

世阿弥

秘する花を知ること。秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず、となり。この分け目を知ること、肝要の花なり。

そもそも一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるがゆゑなり。しかれば、秘事といふことをあらはせば、させることにてもなきものなり。これを、「させることにてもなし。」と言ふ人は、いまだ秘事といふことの大用を知らぬがゆゑなり。

まづ、この花の口伝におきても、ただ珍しきが花ぞと、みな人知るならば、「さては珍しきことあるべし。」と思ひまうけたらん見物衆の前にては、たとひ珍しきことをするとも、見手の心に珍しき感はあるべからず。見る人のため、花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、ただ思ひのほかにおもしろき上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立て、これ花なり。

（第七）

【口語訳】

秘する花ということを知ること（が重要である）。秘密にすると花が生じるし、秘密にしないとそれは花とはならない、ということである。この分かれ目を知ることが、花について肝要なのである。

そもそも一切の物事、諸道諸芸において、その家々で秘事ということを言うのは、秘することによって大きな効用があるためである。だから、その秘事ということ（の内容）を明らかにしてしまうと、たいしたことはないものなのだ。（しかし）これを「たいしたことはない。」と言う人は、いまだ秘事ということの大きな効用を知らないためにそう言うのだ。

まず、この『風姿花伝』の「口伝（秘伝）」においても、ただ珍しさが花であると（述べているが）、それをすべての人が知ってしまえば、「きっと珍しいことがあるはずだ。」と予期して見物することになり、そうした観客の前では、たとえ珍しいことをしても、見る者の心に、珍しいという感動は生じるはずがない。観客の側では、（珍しい）花のある演技だとわからないからこそ、演者にとってそれが花のある演技となるのだろう。だから、見る人は、ただ思いがけずすばらしい上手な能だとだけ理解して、これが花なのだとも知らないでいるということこそが、演者にとっての花なのだ。そういうわけで、見る人の心に思いも寄らぬ感動を呼び起こす手立てが、つまり花なのだ。